

氏名(本籍)	佐藤貢悦(茨城県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第656号
学位授与年月日	平成3年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	古代儒家思想と易的論理—天命思想の演変—
主査	筑波大学教授 文学博士 高橋 進
副査	筑波大学教授 広 神 清
副査	筑波大学教授 奈良 博 順
副査	筑波大学助教授 文学博士 堀池 信 夫

論 文 の 要 旨

本論文は、古代儒家思想と易的論理の思想史的意義を闡明することを目的とする。著者はまず、氏族制に立脚する周代封建制の秩序維持の根幹であった礼楽制度（礼制）に密接な関連を持つ天命思想が、人倫共同体の価値の根源たる境位に動揺を来し、それにしたがって、周代礼制が崩壊に至る要因に、自然観の変容と人間観の変遷があったことに注目し、これを視点として、儒家の開祖たる孔子から孟子、荀子、更に『易伝』の成立する過程において、この天命思想がどのように変容しつつ、古代儒家思想形成の要因となっていたかを、内在的且つ精密な原典研究に重点をおいて倫理思想的に究明したものである。

論文全体の構成は、序説に続いて本論を5章に分けて論述し、第6章をもって結論とする。序説は、本研究の目的及び対象と、時代設定における本研究の視点を述べる。

第1章は、天命思想と礼制の動揺に至る過程を考察し、礼制は本来的に周代封建の秩序であったが、その崩壊の直接的契機が政治理論としての天命思想の動揺にあったことを論ずる。著者は、この経緯と原因について、社会経済史的に説明する従来の見方とは異なり、天命思想に内在する合理的思惟そのものの展開に問題の本質があるとみて、その瓦解は思想史の必然であったということを論証的に主張する。

第2章では、礼制の崩壊が、新たに「士」階層の形成につながったこと、そしてそこに儒家思想の興起が位置付けられることを解明した上で、孔子によって確立された儒家思想の基本的性格とその歴史的意義とを論ずる。著者によれば、人間の主体性を根底に置き、そこから、礼とそれに基づく人倫とを再確立しようとした孔子の思想は、かかる時代状況への最初の解答であったとされる。人倫共同体は、礼を根幹として成立するという孔子の理念において、礼は人倫の統一規範として示されたもの

であり、また西周の礼制とは異なり、仁を内実とする行為の形式として主唱された道徳的規範であったが、礼の客観的根拠、及び人間主体が如何にして本性的に徳の担い手たり得るかという問題については、孔子はそれを明示しなかったとする。孔子における天命は、人間の道徳的実践を積極的に支持する一方で、道徳行為を阻む外在的な運命という性格を有しており、天命観念におけるこの矛盾対立は、実践主体としての孔子個人において、自己の運命を深く感得しながら、反面また自らの使命を確信してこれを貫徹するという方向で克服されたとする。

第3章では、孟子が孔子の思想を継承しつつ展開し、礼を人間主体の内面に位置づけ、これを徳と同視することによって、徳の所在ないし発現の根拠としての性の問題に教説の重点を移していったことを論ずる。著者は、孟子思想の特性が、その性善説に基づいて、心一性一天の一貫せる論理体系を組織した点にあることを詳論し、性と同じく天に基づくとされる命は、孟子においても人間の外に在ってこれを制約し限界を与えるものとして捉えられるとともに、性は天より与えられる一般的・積極的側面であり、命はその個別的・消極的側面として位置づけられ、その結果、自己修養を通して道徳的本性としての「性」のなかに感覺的本性にかかる「命」を解消するという主観的解決が図られるとする。

第4章においては、荀子の思想を論じ、彼が孟子の性善説を批判的に継承しながら孔子の礼論に回帰し、さらにその客観的根拠を探求したことを解明する。荀子思想の特質は、その自然観に由来し、しかもそれは、外的自然としての天を徹底して対象化したものであったというのが、著者の見解である。さらに荀子の天は、万物の自生・自化・自展を当体とし、運動（神）とその法則性（道）を総称したものであったから、かかる自然観のなかでは、人間の本性は自然の一環として見做され、内的自然として規定され得るとし、これによって、徳は性から除外されて後天的に獲得するもので、およそ道徳的・価値的なるものは、無為（性）からではなく、作為（偽）によって生まれるという「性偽の分」が主張されたとする。

著者によれば、自然の法則が直ちに実践の理法としての礼ではないとする「天人の分」の主意は、天道の運行と人為とを教説の上から区切るもので、「性偽の分」と相俟って、人間の主体的実践を強調するための要請であったとされる。そして、この「天人の分」の論理から析出される「命」には、自然法則としての天道にかかる命と、人道にかかる命との二義性があったとし、人道にかかる命が、人間の主体的実践による価値の創造という独自の領域を強調する反面において、天道にかかる命は人間存在の被制約性を示しており、そうした被制約性のもとでは、運命のもつ消極的意味は伏拭されないものの、注目されるのは、従来の主観的解決とは異なり、天道の運行という客観的対象のなかでその消極的制約性を解消する方向を示し、これによって『易伝』の性命観を準備したことであったという経緯を詳細に論述する。

第5章においては、自然観を中心として、荀子の論理型をほぼ継承した『易伝』が、存在と実践の理法を統一して、天道と人道を一貫した論理で結び、天命思想に新たに意義を付与したことを論じ、そこでは、占筮から古来の呪術的性格を払拭して、これを道徳論の範疇に組み入れることによって聖人の理念が高揚されたことを明らかにする。著者によれば、『易伝』の思想においては、人倫の究極的

価値を指示する聖人の理念は、天道の人格的表現と看做され、これと人倫を率いる道徳的实践者としての君子との相関は、そのまま天道と人道、天と人との相関という意義を伴うものであったとするとともに、ここに創出された新たな天人関係によって、人道の根拠としての天道が明確に論理化されたことを論証する。さらに重要なことは、天道つまり陰陽の循環・交替の法則の人間主体における一般性が「性」、その個別性が「命」とされ、両者に一貫する理法が措定されることによって、「性」と「命」はその循環法則のなかに定位を占めたことであるとする。このことは、運命のもつ非合理性つまり従来人間存在を制約するものとして観念されてきた命のもつ悲観の意味が、陰陽の循環・消長という論理のなかに解消されたことを意味し、天命思想の歴史的展開のなかで、初めてその客観的・論理的な解決が図られたもので、天人相関の論理とともに、『易伝』が古代儒家思想と漢代以降のそれとを連結する架橋であったことを示すものであることを詳述する。

結論は、以上の論究をまとめて、本論文の主旨と成果を明らかにしている。

審 査 の 要 旨

中国古代儒家思想に関する研究は、古来、内外において多様な主題のもとに殆ど全面的に尽くされて来たかにみえる。然るところ、著者は倫理学ないし倫理思想史的関心を基底に置き、周代封建制の秩序維持の根幹であった礼制と密接な関連を持つ天命思想が動揺を来し、それに従って礼制の崩壊をもたらす過程に、自然観の変容と人間観の変遷があり、それを契機にして古代儒家思想が生起し展開したことに着目するとともに、その展開過程を貫通する一本の筋が「天命思想」であるとの観点に立って、孔子・孟子・荀子から『易伝』に至る思想展開を、天命思想の演変と性格付けてこれを系統的に考察したもので、その成果は従来の中国古代思想史研究に新たな光を当てたものとして、内外の学界に貢献するところ少なからぬものがあると認められる。

特に注目すべき個々の研究成果としては、次の諸点があげられる。第一に、多数の主要な内外先行研究を丹念に検討し、その採るべきは採り、批判すべきは批判するという態度を明確にしながら、自己の研究成果を闡明したこと、第二に、古代天命思想と合理的思惟との関係を究明するに当たって、特に道徳的实践者としての人間主体を明確に措定したこと、第三に、孔子の礼論の倫理的意義を厳密に検討し、それが仁を内実としながら天ないし天命を予想するものであるとしたこと、第四に、孟子の性ないし善について独自の解釈を提示したこと、第五に、従来多様な解釈のあった荀子の天人関係の論について、極めて合理的且つ明快な解釈を示したこと、第六に、『周易』繫辭伝の倫理思想を構造的に解明し、その自然観、礼、人倫の論理が荀子思想の継承であることを論証したこと、第七に、道徳と占筮との関係を倫理的視点から明快に提示したこと等々は、本論文の特に注目すべき学術的成果である。

他面において、著者の倫理的視点からの思想解釈ないし構成は、極めて明快である反面、その用語が先行して内容の実に適合しない点がみられること、思想の系統的展開はよく跡付けられているが、繫辭伝等における孔子への復古的傾向にも留意すべきこと、老子、莊子等と儒家思想との関係に

も注意を向けるべきこと、思想の倫理的把握において更に精密な検討を要する部分がみられること、これらは著者の反省と今後の研究に俟つところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば中国古代思想史研究に特色ある成果と新しい知見を提示し得ており、学界に貢献するところが少ないものと認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。